

# 「探究活動」のすすめ

## Vol.4 「課題研究」を成功させるための教員の姿勢・役割

一般社団法人Glocal Academy 理事長  
物理学博士  
岡本 尚也 氏

前回（第三回）の記事では、設定した資質・能力ベースの教育目標を達成するためのカリキュラム・仕組みについて述べました。今回は、これらを実行するにあたり持っておくべき指導する教員の姿勢・役割について述べたいと思います。

### ① ある一つの答えに導き、教えることが教員の仕事ではない

探究活動・課題研究の醍醐味は答えの用意されていない課題に対して取り組む力を養成することです。あらかじめ答えの用意されている課題に対する取り組みから得られる学びも非常に大きく軽視できませんが、それらは通常の教科指導の中で日々実施されています。今回の学習指導要領の中で探究活動・課題研究が重視されているのは、社会・時代の変化と共に必要な資質・能力を育むために、教科指導で不足している部分を補うという意味を持っています。少し極端に言い換えるならば、正しい結果（答え）を出すことを重視する教科指導に対して、より正しいと思われる答えを出す「プロセス（過程）」を重視する探究活動・課題研究となります。そのため、通常の教科指導と同じ姿勢で取り組んでしまうと、あまり意味がないと言っても過言ではありません。

では、どのような姿勢が必要なのか？探究活動・課題研究において先進的な取り組みを行っている学校の多くの教員から共通して聞こえてくる声として「生徒から教えてもらっている」というものがあります。一方で同じ学校の生徒に話を聞くと「先生方から日々、指導をして頂いている」と声を揃えて言います。ここで生じるある種の認識のズレ（先生は指導をしているという自覚がないが、生徒は指導を受けているという自覚がある）について、教員の方々からお話をお聞きすると、教員の中に「我々にも答えが分からないから、ある種の伴走者として生徒と一緒に考えている」とい

う意識が根底にあることが分かりました。つまり、多くの教員の方々は教科指導の中で「ある決められた答えに導き、それを教えている＝指導」と認識していますが、生徒にとっては伴走者としての役割も重要な指導であるという認識を持っているということです。教員の方の中には、ある種の責任感の中で、どうしてもその姿勢に慣れず、自分なりの答えを教えよう（誘導しよう）、または自分が得意である程度、答えが分かる分野に誘導しようとするのですが、ここで重要なのが「生徒の主体性」とのバランスです。もちろん、全く何も行わずに生徒が自分達で何かを進めていくのを待つというものにも答えが全く出せないといった問題も生じますが、手取り足取り教え過ぎるのも答えを出すプロセス（過程）を鍛えることができないため問題です。恐らく、この問いに対する答えはなく、それぞれの現場での試行錯誤が必要になってきます。重要なのは、前回の記事に書いたような研究テーマを見つける機会や中間発表・最終発表のような機会を与え、モチベーションを上げること、そして生徒の主体性と教員の誘導のバランスを常に問い続けることです。

### ② 教員の役割1 ～基本的な研究手法を理解する～

では、具体的な教員の役割はどのようなものか？まずは、基本的な研究手法（リサーチメソッド）を理解することです。残念ながら日本の大学の大部分が研究手法を体系的に教えていません。そのため、学校現場で困惑した声が聞かれるのも当然で、一度学士論文（卒業論文）を書いただけでは、他者に教えることはかなり難しいと言えます（例えば、引用の正しい行方等）。先ほど、教員の姿勢として、生徒に答えを教える必要はないと述べましたが、研究の基本的な手法（ものの考え方、作法）に関しては指導が必要です。剽窃等に係る研究倫理、実験やフィールドワークに関

する危機管理の方法、インタビュー調査やアンケート調査におけるサンプリングや、実験方法の理解（例えば、電気・電子回路の仕組みが分からずに電気測定を行うことは、安全面・研究結果の信用性の両面から問題があります）等は、生徒に先んじて学ばなければなりません。それらの一端は拙著、課題研究メソッド（啓林館）にまとめましたが、最低限の正しい研究手法への理解は教員研修等を通じて深め、生徒に「教える」必要があります。

### ③ 教員の役割2 ～質問を質問で返す～

次に、教員の方々が日々生徒の皆さんと接する際に心がけることについてです。生徒の多くは行き詰まった際によく教員に質問に来ます。その際に、直接的にその質問に対する答えを教えないということが重要です。例えば、オックスフォード大学大学院の試験問題に次のようなものがあります。「日露戦争は現代日本史において転換点であるか説明しなさい（著者訳）。これに対して多くの読者が「難しい」「どう答えて良いか分からない」と感じるとしています。その際に、有識者に聞きに行き行って答えを教えてもらっても、「なるほど」と思うことがあっても自分自身でその答えを導く力はあまり付きません。このような場面で考えるべきは「なぜこの問題は難しいのか？」「何が分かたら答えられるのだろうか？」ということです。つまり、この問題に答えるためには何が必要なのか、ある種の因数分解を行うことです。大きな問いを小さな問いに分解し、大きな問いに答えるための要素を明確にし、それぞれをクリアしていくことです。そうすることによって、大きな問いに対する取り組み方を学ぶことができ、答えのない課題や、大きな問いに考える力が養成されます。是非、生徒からの質問・問いに対して「何が分かれば、それが分かるようになると思う？」と質

問で返してみてください。

①で述べたように、探究活動・課題研究の指導にも答えがありません。しかし、これらの活動を自分自身も生徒と共に学び、向き合い、成長していく姿勢を持つことで、戸惑いではなく、双方にとって充実した学びの時間となります。



(写真)  
課題研究メソッド Startbook（新興出版社啓林館）  
岡本尚也著 / 課題研究メソッド

### 岡本 尚也 氏 プロフィール



1984年、鹿児島県に生まれる。慶應義塾大学理工学部卒、同理工学研究科修了後、ケンブリッジ大学にて物理学博士号を取得。その後、オックスフォード大学にて日本学修士号を取得。ケンブリッジ大学在学中の研究結果がNature Materials等、世界トップジャーナルに論文が掲載された。帰国後、一般社団法人Glocal Academyを創業し、社会や学術における諸課題を研究的手法を用いて解決する事を目的とし、後進の育成やそれら課題に取り組む個人及び企業・団体を支援している。